第５学年　社会科の実践

１．　単元名　「未来を支える食料生産」３　これからの食料生産（全１０時間　本時８時間目）

２．　単元目標

○我が国の食料生産の概要や、食料生産が国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを理解するとともに、地図帳や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べまとめる技術を身に付けるようにする。 ○食料の生産や輸入に見られる課題を把握して、その解決に向けて多角的に考える力、考えたことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。 ○我が国の食料の生産や輸入について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、我が国の産業の発展を願い我が国の将来を担う国民としての自覚を養う。

３．　「ひびき合う三の丸の子どもたち」にせまるために

研究課題「子どもが解決したい問題を持ち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成」 手だて・・・子どもたちの願いや思いを見とった単元構想と授業作り 高学年ブロックテーマ「仲間への理解、自立する自分」 ・仲間を理解しつつ、自分の思いも大切にする姿 ・新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿

＜聴く・話すについての指導＞

「聴く」という点では、子どもたちと話し合いの場を設定しながら、クラスの『聴くマナー』を作った。『反応』ということをキーワードにあげながら、友だちの話に自分なりに反応することを大切にしてきた。声を出して反応することだけでなく、つぶやくこと・分からないと首をかしげることなど、聴き方の多様性を認めつつ、良い反応を取り上げて指導してきた。見本となる児童がいるが、全体ではまだまだ指導の途中だと考えている。

「話す」という点では、学習中全員が発表する場面を意図的に作ったり、暗唱をして人の前で話したりすることをしてきた。また、みんなで励まし合うことが大切だと指導している最中である。

授業の中では、まず隣同士や近くの友だちと意見を交換することで、自分の考えを伝えられるような場面をできるだけ入れるようにしている。さらに、区切って話すこと・みんなに問いかけながら話すことや、「○○さんと同じで」と付け足しながら自分の考えを伝えるようすることを声かけしている。友だちの意見に反応することで、温かな関わり合いができるようにしている。

＜これまでの関わり合い・ひびき合い＞

興味をもった活動や自分たちに関わりのある課題であると、「やりたい！」「どうにかしないといけない。」「調べてみたい。」など前向きな姿勢が見られる。社会科の前単元「水産業のさかんな地域」では、小田原で獲れる魚や早川漁港についてインターネットで調べ、調べたことを交流する姿が生き生きとしていた。調べたことを交流する中で、「定置網ってどんな取り方かな。」「セリを見たい。」「小田原でどんな魚が捕れるのかな。」「相模湾で本当に６０種類も捕れるの。」「なんで小田原の魚は新鮮なの。」など様々な疑問が出てきた。調べたことから疑問を持ち、さらに次の学習へと繋いでいけるようにしている。疑問や知りたいことの中には、子どもらしい思いつきもあるが、調べて分かったことが他の疑問と結びついたり、関連して考えたりすることに繋がることもある。そのため、児童の意欲を大切にしながら、学習を進めている。

関わりの中で、二つ課題がある。一つは、問いに対し、既習事項を生かして自分の予想や考えを持つことである。二つは、一部の児童の意見で話が進んでしまうことである。特に後者は、これまでの学習でも意見を持

っているのに、自信のなさで発言を躊躇していることがある。そのため、ペアやグループで考える場を作り、みんなで考えた意見を話したり、自分の意見を伝え、友だちから励まされることで自信にしたりと経験を積み重ねてきた。また、全体を巻き込んでの話し合いができるように、一度立ち止まって切り返してきた。本時でも、今までのことをいかして、意見を言えそうな児童に声をかけて意図的に指名をしたり、全員の意見をマグネットで示したりするなど、みんなで考えていけるように工夫したい。

（２）単元と指導

＜単元について＞

本単元では、日本の食料自給率の低さ、輸入に頼っていることを捉えて、それに伴う課題を考えていく。輸入食材のおかげで豊かな食生活が成り立っているため、「輸入が悪いこと」と決めつけないように留意する。安全面や国内生産とのバランスが保てない時に輸入はどうしても必要なことを押さえることが大切になってくる。

食料生産は、これまで学習してきた「米づくりのさかんな地域」や「水産業のさかんな地域」の学習を踏まえたまとめのような位置づけである。米づくりでは、農家の高齢化や後継者不足、１９９３年に冷害が起き外国米を輸入し始めたこと、米の生産量が減り消費量も昔と比べ減っているということ、日本人の食生活も変化してきているということを学習してきた。水産業では、漁師が減少していること、水産物の輸入の多さを学習している。その際に考えなければならないのが生産者と消費者という視点である。調べ学習や動画・実際の話を聞いて、農家や漁師の苦労や努力を考えてきた。その学習が土台となり、より多面的に多角的に考えるのが本単元である。国内の食料生産の発展について、これまでの学習を総合して考え、話し合ったり、ノートにまとめたりしながら外国との関わりや生産者の頑張りについて考えを深める。そのことから、消費者としての意識をより高めること、今後の食生活を見直すことに繋がっていき、世界の社会事情にも関わる価値のある単元であると考える。また、児童にとっても、身近な食生活に関わるという切実な問題になり、考える魅力があると考える。

＜指導について＞

本単元では、これまでの学習との関わりが大切になる。「米づくりのさかんな地域」や「水産業のさかんな地域」で学習したことをいかして、日本の食生活から学習を始めた。児童の興味がありそうな寿司や和食などの写真を提示し、その生産地について考えた。児童は、本単元までに日本の地形が魚を採ることに適していることや、たくさんの地域で米を作っていることを学習しているため、日本で作られたものが多く食べられていると予想した。しかし、実際には米はほぼ国産だが、魚や和食にかかわる食材の多くは外国産である。児童は、その事実に驚き、日本の食料自給率が低いということを知った。資料を読み取り、分かったことや児童の疑問を繋いでいくことで、学習を継続していけるようにする。

「輸入に頼っている。」「国内の食料生産と食料自給率が減っている。」「昔と比べて食料自給率が減っている。」ということを知ると、「どうして昔と比べて食料自給率が低くなったのかな。」という問いになった。予想の後、資料や教科書を読み取ると、土地の広さの問題や生産者の減少、外国産の価格の安さなどに気づいた。児童の感想の中では、「輸入は大切。今のまま頼る。」「輸入を減らした方がよい。」「輸入を減らしたいけど、難しい。」という様々な意見が出てきた。輸入に頼る・輸入を止めるというどちらの考えを選択しても、様々な問題が起こることが予想される。国内で冷害が起き、外国から米を輸入してきたことを思い出す児童もいるだろう。だが、子どもたちにとっては具体的にどんなことが起こるのかというのはあまり想像できない部分もある。そのため、過去の日本で起きた事例や本などから資料を提示していく。そうすることで、遠くかけ離れた話ではなく、現実味のある話し合いになり、より切実感を増すと考えるからだ。資料はいつでも見ることができるようにし、興味のあるものを手にとって、自分なりの意見を持てるようにする。

本時の学習問題は、「このまま輸入に頼ってよいのかな？」である。自分なりの考えと理由をもって話し合いに参加する。だが、「輸入を継続する」「輸入を止める」という２つの意見に偏るほど、反対や疑問が出てくる問題である。だが、両極端の意見ではなく、「どちらかというと・・・」という意見も多く出るであろう。そのため、自分の立場を示すことや、板書も端的な印象に残るように構造化し、さらに掲示物を残すようにする。一人の考

えでは思いつかなかった「輸入」や「国内生産」の良さや問題点を、みんなの考えを出し合うことで、自分とは異なる新しい価値観に出合い自分なりに「輸入」や「国内生産」に対する多面的な見方を構築していくことができる。そうした姿をひびき合いの姿としたい。全体の話し合いの中でどちらかに意見が偏ったときには、資料を提示し、ゆさぶりをかけたり、問い返したりする。そうすることで、「本当にできるのか。」と考え直すことに繋がり、「輸入」と「国内生産」の大切さを感じることができるようにしていく。また、自分ごととして考えることができるように、国内生産では消費者・生産者双方がそれぞれできることを考える。自分たちの生活を見直し消費者としてどんなことができるか、生産者はどんな工夫や努力ができるのかを考えさせていきたい。

5.単元構想　第5年　社会科「これからの食料生産」全１０時間　１０月２２日（木）８校時

単元目標

○我が国の食料生産の概要や、食料生産が国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを理解するとともに、地図帳や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べまとめる技術を身に付けるようにする。
○食料の生産や輸入に見られる課題を把握して、その解決に向けて多角的に考える力、考えたことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
○我が国の食料の生産や輸入について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、我が国の産業の発展を願い我が国の将来を担う国民としての自覚を養う。

【既習事項】
・農業（米作り）　・水漁業
・生産者の努力や工夫
・国民の生活を支えている
・土地の自然条件や特色を生かしている
・時代とともにやり方やあり方が変化している
・生産者には苦労や悩みがある
・外国から輸入しているものも増えている（TPP）
・日本の農業や水産業に対する誇り

どのくらい輸入に頼っているのかな？①

産地を知り、食生活や食料の輸入について思ったことを表現している。【思判表】

魚の話から・・・すしネタや和食の産地について予想する。
・マグロ、いか、サーモン、えび　・おいしいよね
・マグロは漁業の学習でとれてたね
~~・米はほぼ国産だった~~　・国産だけじゃないよ
~~・魚も日本の海でとってたね~~　・生産量と同じくらい輸入もしているよ

資料提示　すしネタの食料自給率

用語：食料自給率

・輸入の食材を食べている　・えー、ほぼ輸入に頼っている。　・どうゆうこと。
~~・えびはほぼ輸入なんだ~~　~~・他の食材はどうなの？~~　・和食じゃないね　・日本の食べ物なのに・・・

資料提示　和食の写真『ジュニア農林水産白書２０２０年版』

なんで食料自給率が低くなったのかな？②・③・④

予想しよう

・食生活が変化したからかな　・米の時に輸入してた（TPP）
・米あまりで作らなくなった　・生産調整をしてたもんね
・他の食料も輸入している　・いつから低くなったのかな？
・食べているものも、売られているものも外国産が多い
・輸入品が増えているんじゃない　・安いから

・小麦も大豆も外国産なの　・国産のものって全然食べてないね　・大豆が８％　・自給率が低い
・スーパーに行くと外国産のものばっかだった　~~・広告にも外国産がのってた~~　外国産って安いよね
・昔は輸入してないから国産だったのかな？　~~・確かに国産だけでみんな食べてたのかも~~
・昔は国産のものを食べてた　・今はなんで外国産が多いの
・輸出はしているの？　・生産しているのに輸入に頼っているの？

資料提示
昔と今の食料自給率の変化

食料自給率の変化について予想を話し合おうとしている【態】

調べてみよう

・オーストラリアやカナダは食料自給率が高い。　・土地がある。面積が広い。
・小麦や肉類は輸入量が増えている。
・いろいろな国から輸入をしている。
・海外は食糧自給率が高い。　カナダはすごいね。
・魚や貝類は１９９５年で下がっている。
・値段も安いんだ。
・土地が広くて、たくさん作っているから値段が安くなる。

食料自給率の変化について、食料の自給率の変化や食料の生産量の変化、外国との貿易について調べ分かったことをまとめようとしている。【知技】

資料提示・食料の自給率の変化　・食料の生産量の変化
・貿易相手国について・他国との食糧自給率の比較
・国産と輸入農産物の値段
☆日本の食料自給率３７％（２０１８年度）
☆海外の食糧自給率　カナダ２６４％　オーストラリア２２４％　アメリカ１３０％など
食べ物の多くを輸入に頼っている現状や食糧自給率の推移についての状況を知る。

「日本の食料自給率が低いのは、輸入しているからなんだ。」「輸入量が多いね。」「土地がないからか。」「輸入に頼りすぎだね。」「輸入ってすごいね。」「輸入をするのはしかたないよね。」「どうにかしないといけないのかな。」「自分たちができることはあるのかな。」「このまま輸入に頼っていいのかな？」

資料からまとめたことをもとに、食料自給率が下がった理由を考えている。【思判表】

みんなで資料を読んで話し合ってみない？いいね。

このまま輸入に頼ってよいのかな？⑤・⑥

資料提示：世界の人口増加
食品ロス　食料危機
狂牛病　冷害で米の輸入
工業製品の輸出　など

資料を読んで考えを作ろう

・世界の人口が増えていて、アフリカが一番多くなる。　・１９９３年に冷害が起きて、米を輸入した。
・~~外国の米は高い関税をかけているから、日本の米は守られている。~~　・~~食品の食べ残しや賞味期限切れで捨てている~~。
・他の国と貿易をしている。　・人口が増えると、輸入していたものが入ってこなくなる。
・~~日本も狂牛病や鳥インフルエンザが起きた~~。　・食料が十分にある国と食料が足りない国がある。
・ぜいたくになった食生活が影響している。　・日本は、工業製品を輸出している。
・~~日本では水耕栽培を行っている。~~　・輸入品の検査をしても、汚染された食品の輸入を完全にくいとめるのは難しい。
・~~輸入が止まったら、配給制もある。~~　~~・いも類が主食。~~　・ふだん輸入していない国から急に輸入してもらうことはできない。

食料を輸入することの長所や短所について、資料を的確に読み取って整理している。【知技】

７．実践を終えて

（１）　本時に至るまでの経過

単元のスタートは、前時に学習した水産業と絡めたすしネタクイズを出し、児童にとって身近な題材から入った。小田原は港が近くにある立地であり、魚が好きでよく食べる、また肉より魚派の児童も多く、魚に親しみを持っていた。すしネタを取り上げ、産地を想像しながら授業を進めた。身近な魚が全て小田原産、日本産ではないのではないかと児童は想像を膨らませていたが、すしネタによっては国産のものもあると思っている児童も多くいた。結果としては、大体のネタが外国産であった。そして、日本は輸入に頼っているという事実に驚いていた。和食や洋食のメニューでも、児童が好きな食べ物の多くは輸入品であることが分かり、「輸入ばっかり。」「和食なのに外国産だ。」など日本の食べ物の多くは輸入に頼っているということに衝撃を受けていた。そこから児童の思いは、「日本でも農業や漁業をしているのに、輸入に頼らないといけないのか。」であった。農業や水産業の学習をしていたので、農家や漁師の思いや苦労などを知っていた。食料自給率が低くなった原因として、高齢化による人手不足や、米の不作により外国から米を輸入したことなど以前の学習で学んだことを繋げながら理由を考えていた。日本の産業を守りたいという思いがある児童は、「輸入をやめれば良い。」「国産を買えば良い。」という考えもあった。しかし、現状からして実現が難しい。また、輸入をすることは日本にとってメリットもあるからだ。他にも、一度輸入をしたら国とのやりとりを自分勝手にはやめられないことや、日本の昔と今の食料自給率の減少など様々な問題点から、「輸入はなるべく頼りたくないが、今の日本の現状から見ると頼らないと生活が成り立たない。」という捉えに変わっていった。

（２）　本時での様子

本時の学習問題は、「このまま輸入に頼ってよいのかな。」であった。この問題に対する自分の意見を持つため

の手立てとして、前時の学習で教師側が厳選した資料を読み、自分の考えの根拠になるようにした。様々な資料を読み自分の意見を持っているので、多面的に見ている児童もいた。また、漠然とした考えではなく、資料のポイントを押さえて根拠を言っていた。

「A 輸入を続ける」「B 輸入を少しずつ減らす」「C 輸入を減らす」と大きく３つに分類したときの自分の立ち位置を明確にし、話し合いを進めた。A、B の意見が大多数で、C の児童は１人、C よりの意見の児童も２人から本時の学習が始まった。全体での話し合いでは、友達の意見に反応する姿が見られ、話しやすい雰囲気があった。どの児童も真剣に考え、友達の意見に共感したり、新たな視点を見つけたりしていた。そして、それぞれの立場から意見を言う中で、「外国で冷害があるかもしれない。」と言った児童がいた。その言葉を取り上げ、「外国で取れなかった時」にどんな影響があるのかを考えた。国産でまかなえる３食のメニューを提示し、イメージを膨らませた。すると、「日本の人が餓死してしまうかもしれない。」「日本の食料自給率を上げないといけない。」などの意見が出た。そのことから A、B の意見であった児童も、C に気持ちが傾いた児童の意見から物事を新たな視点で見ることに繋がった。

（３） 単元を通しての成果と問題

〈成果〉

・資料や既習事項を活かした話し合いができていた。資料は、教師が厳選したものであり、全てを提示するのではなく、わかりにくい言葉などは事前に手直しをし、一人ひとりが考えを持ちやすくなるように配慮した。その結果、たくさんの資料の中から自分なりに必要な資料を選び、思考錯誤しながら自分の考えに根拠や理由をつけてまとめ、説明することができていた。また、話し合いの中で、日本と他国との関係性が話題になった。その時に、農業で学習した TPP のことを思い出した児童がいた。その児童のつぶやきから、海外とのやりとりに目を向ける児童もいた。

・学習問題に対するつぶやきが多く聞こえ、一人ひとりが真剣に考えていた。学習問題が児童の切実な思いになっていたので、お互いの考えを伝え合いたいという意欲に繋がっていた。ペアやグループ活動など少人数であるからこそ、安心した環境の中で自分の考えを伝えることができた。

〈課題〉

・自分ごととして捉えることができなかった。学習の過程として、日本の農業や漁業を学んだ後に本時の単元であるが、日本の農業や漁業のすごさを知っていても、日本人として国産を守りたいという気持ちが薄かった。それは、自分ごととして捉えるという視点が学習の中で少なかったこともある。さらに、農家や漁師が人手不足になっているという事実を知ったときに、「魚やお米は食べたいけれど、自分は農家や漁師にはならない。給料は少ないし、命がけだったから。」や「人手が足りないなら、誰かが農家や漁師になれば良い。」という人任せで短絡的な考えもあった。そのつぶやきもあり、「国産を守りたい」という思いが強い児童でも、根拠のある意見を考えることができず、輸入に頼ろうとする意見によってしまった。国産も外国産もメリットやデメリットはあるが、既習事項から自分の思いを持って様々な意見を聞き、自分の考えを作り直し再構築する場面があれば良かった。そのためには、前時の学習から本時まで継続して児童思いを持たせる場面を設定し、考えを見取る必要があった。

・本時の学習課題は、児童の思考のながれに沿ったものであった。しかし、話し合いの中でひびき合う場面が作ることができなかった。そして、教師が児童に投げかける場面が多く、児童同士のやりとりが少なかった。それは、教師の不明瞭な発問や児童の考えを揺さぶったり、立ち止まったりする適切な資料でなかったことが原因である。児童は意欲的に話し合ってはいるが、本時の学習問題から徐々にそれてしまった。児童のつぶやきから、教師はどの言葉を注目するか、取り上げるべきかを事前に持っておく必要があった。また、児童の発言やつぶやきに対して、質問で返したり、他の児童に広めていったりすることで、児童の言葉を繋げるようしていきたい。教師の出所を見極めていくことで、児童同士のやりとりがさらに活発になり、ひびき合いに繋がると感じた。